



続日本アマチュア天文史

続日本アマチュア天文史編纂会編
恒星社厚生閣, 384 ページ, 4017 円

読み物

お薦め度
☆☆☆★★

このような表題の本が再度にわたり商業ベースによって出版できることに驚いてしまう。たとえば日本天文学会が会員の“研究活動史”といった本をだそうと計画したら、恒星社は引き受けてくれるだろうか？ いやそれより前に執筆者が集まるかどうか。ところがこちらには熱心な書き手と、多数の読者がいる。これは、そういうふしぎなエネルギーをひめた集団の話なのだ。

この本は天文アマチュアの“研究”活動の記録である。7年前にでた正編では、大正デモクラシーの時代に始まり二度の世界大戦を経て戦後へいたる年代の、人々とその足跡の、記憶や回想がしるされていた。こんどのは続編であって、1960年代から昨年7月におこった彗星の木星衝突まで、現世代人の活躍のようすをのべている。

対象となった天体や現象は太陽、惑星、日月食、掩蔽、流星、流星塵、彗星、小惑星、変光星、人工天体まで多岐にわたる。天文学史と民俗学の仕事も報告されている。“研究”の中身とレベルは、表紙カバーに使われた皆既日食コロナのカラー写真に象徴的にあらわれている。説明がなければ太陽の専門家の仕事かとおもってしまう。総じてアマチュアのやり方は現代科学のそれを手本にして、専門の科学者とほとんどちがわない。

観測方法の進歩にも増して、正編の時代からとくに変わったのは、活動が国際的に広がったことだ。アマチュアはレフェリーのいる学術誌へ報告や論文を送ることが少ないため、とかく専門家から無視されがちだが、本書の記述をみると国外では評価が高いことがわかる。いまや、アマチュアのひそかに抱いていたフラストレーションは解消

された。アマチュア万歳！ と叫ぼう？

巻末に人名索引があり、千人をややこえる名前(話のつごうで顔をだす諸方面の学者や専門家、外国人はのぞいて)があがっている。そのなかで女性は32名。アマチュア天文学は腕力と金力がものをいう男のホビーということか。日本天文学会の会員140人、天文教育普及研究会の46人(会員総数は600)の名前もみえる。しかし、いい成果をあげていながら紹介されぬ人や仕事が少ないし、とくに教育・普及だけをやり“研究”をしない個人、団体は活躍しても登場の場がない。アマチュアの活動は捉らえかたによっては一つの社会現象とみられるはずだが、その視点もまたない。ともに書き手の限界だとしても、惜しい。

ここにしるされた活動の中身さえ、外からみると、私が老化したせいか、せせこましくなって意外性や面白みは減っていると感じた。現代科学は普遍的な法則の発見を目標にしつつ、自然をこまかな部分にわけて個々別々にあつかう。そして極端に専門化した結果、事象間の関係に目がとどかなくなった。アマチュアがこんな現代科学の問題点までとり込んでしまったのでなければいいが。制度の束縛をうけがちな専門家とはひと味ちがうアマチュアであるなら、自然から切りとった個々の観測データをつみ重ねてよしとするのでなく、現象相互の関係に、いふなれば多体問題に目をむきたいものだ。これはまた19世紀博物学の手法をみなおすことにもあたる。

とはいっても、関係者には絶対おもしろい本だろう。「他校の同窓会史に興味をもつ」タイプの人にも薦められる。 斎藤馨児(東京都在住)